

天声人語

1951年秋、昭和天皇は滋賀県の信楽しがらきを訪問している。幼いときに集めた焼き物のタヌキを思いだし、歌にこう詠んだ。
へをさなき日あつめしからになつかしも信楽焼の狸たぬきをみれば

▼「あの歌が新聞で報じられ、信楽焼といえはタヌキという印象が一気に広まりました」と県立信楽窯業技術試験場長の川澄一司かわすみかずしさん(57)は話す。NHKの連続テレビ小説「スカーレット」の舞台である信楽は、その源流を鎌倉時代にさかのぼる窯業の里である▼いま信楽の陶器組合の生産額でいえば、タヌキの比重は3%にすぎない。現在の主力は外装タイルなどの建材という。「時代ごとに需要を見きわめ、過去の名にしがみつかない。しぶとさが強みです」▼たとえば江戸時代の信楽は茶つばや神仏具で知られた。明治に入ると火鉢が主力に。昭和の初めには、火鉢の全国シェアの8割以上を占めたという。養蚕の盛んだった時代には「糸取鍋」。駅弁の全盛期には「汽車土瓶」。戦争中は陶製の手投げ弾や地雷も製造している▼「ろくろ坂」「ひいろ壺つぼ坂」「炎の美通り」。案内板にひかれ窯元の並ぶ通りを歩く。民家の表札や橋の欄干にも焼き物が使われ、千年に迫る長い陶芸史を実感させる▼ドラマの脚本作りの参考となった神山清子こうやまきよこさんは80歳をすぎて地元にご健在と聞く。大阪出身という設定だが、実際は長崎の生まれ。創作とは知りつつ、信楽の人々は、自分たちの愛する街がどのように描かれるのかワクワクしながら楽しんでる。